

英語コーパス学会第32回大会

ワークショップ《From Language Analysis to Language Simplification with *AntConc* and *AntWordProfiler*》

会場：研究講義棟2階マルチメディア室(216室)

時間：10:00～11:45(9:30受付開始)

講師：Dr. Laurence Anthony (早稲田大学)

定員：先着50名

参加費：会員無料・非会員1,000円(申し込みは郵便・電子メールで事務局まで)

日時 2008年10月4日(土)

会場 東京外国語大学府中キャンパス (〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 <http://www.tufs.ac.jp>)

受付開始 12:00 (研究講義棟1階マルチメディアホール(101室)前)

開会式 13:00 (研究講義棟1階マルチメディアホール(101室))

- | | | |
|-------------|----|--------------------|
| 1. 会長挨拶 | 司会 | 山崎 俊次 (大東文化大学) |
| 2. 開催校挨拶 | | 赤野 一郎 (京都外国語大学) |
| 3. 学会賞授与式 | | 小林 二男 (東京外国語大学副学長) |
| 4. 事務局からの連絡 | | |

< 研究発表第1室 (研究講義棟1階マルチメディアホール(101室)) >

研究発表1 13:40～14:10

英国高級紙社説における人称代名詞 Involvement と detachment

司会 保坂 道雄 (日本大学)

三木 望 (大阪大学大学院生)

研究発表2 14:15～14:45

句重複句における動詞と不変化詞の結合特性について 対応分析を用いた考察

杉森 直樹 (立命館大学)

研究発表3 14:50～15:20

現代英語における there+be の文法化 歴史的発展の視点から

家口 美智子 (摂南大学)

< 研究発表第2室 (研究講義棟1階(102室)) >

研究発表1 13:40～14:10

日本人英語学習者の形容詞得意表現 NICE の習熟度別データの分析から

司会 小林 多佳子 (昭和女子大学)

小島 ますみ (名古屋大学大学院生)

研究発表2 14:15～14:45

品詞連鎖に着目した日本人英語学習者の中間言語の特徴分析 学習者コーパスNICEを用いて

阪上 辰也 (名古屋大学)

古泉 隆 (名古屋大学大学院生)

小島 ますみ (名古屋大学大学院生)

杉浦 正利 (名古屋大学)

研究発表3 14:50～15:20

LDOCE3における語用論的定義 特に語彙辞書に注目して

白土 淳子 (北海道大学大学院生)

園田 勝英 (北海道大学)

< 休憩 15:20～15:40 >

シンポジウム 15:40～17:50 (研究講義棟1階マルチメディアホール(101室))

《 ESP におけるコーパス活用の意義と課題 》

第1部 ESP におけるコーパスの意義 PERC コーパスを例に

司会 石川 有香 (名古屋工業大学)

第2部 ESP コーパスを利用した英語教育 様々な試み

講師 野口ジュディ津多江 (武庫川女子大学)

論文読解・論文作成のためのESP コーパスの利用

講師 石川 有香 (名古屋工業大学)

コーパスとしてのWeb resources の利用

講師 野口ジュディ津多江 (武庫川女子大学)

口頭発表のためのバイリンガル・コーパスの利用

講師 国吉 ニルソン (早稲田大学)

閉会の辞

投野 由紀夫 (東京外国語大学)

《 懇親会 時間：18:10～20:00 場所：学生会館 円形食堂 会費：4,000円 》

英語コーパス学会 (Japan Association for English Corpus Studies)

会長 赤野 一郎 事務局 〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室

TEL: 03-5399-7372 E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp 郵便振替口座 00940-5-250586

URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html>

◆ 大会当日、入会受付もいたしますので、お誘い合わせの上ご参加下さい(年会費 一般5,000円 学生3,000円)。

◆ 「当日会員」としての参加も受け付けております(会費1,000円)。

英語コーパス学会

第 32 回大会資料

日時: 2008 年 10 月 4 日 (土) 午後 1 時より (正午受付開始)

会場: 東京外国語大学府中キャンパス

(<http://www.tufs.ac.jp>)

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

第 32 回大会プログラム

ワークショップ《From Language Analysis to Language Simplification with *AntConc* and *AntWordProfiler*》

会 場：研究講義棟 2 階マルチメディア室(216 室)

時 間：10:00 ~ 11:45(9:30 受付開始)

講 師：Dr. Laurence Anthony(早稲田大学)

定 員：先着 50 名

参加費：会員無料・非会員 1,000 円(申し込みは郵送・電子メールで事務局まで)

日 時 2008 年 10 月 4 日(土)

会 場 東京外国語大学府中キャンパス

受付開始 12:00(研究講義棟 1 階マルチメディアホール(101 室)前)

開 会 式 13:00(研究講義棟 1 階マルチメディアホール(101 室))

司 会 山崎 俊次(大東文化大学)

1. 会長挨拶

赤野 一郎(京都外国語大学)

2. 開催校挨拶

小林 二男(東京外国語大学副学長)

3. 学会賞授与式

4. 事務局からの連絡

< 研究発表第 1 室(研究講義棟 1 階マルチメディアホール(101 室)) >

司 会 保坂 道雄(日本大学)

研究発表 1 13:40 ~ 14:10

英国高級紙社説における人称代名詞 Involvement と detachment 三木 望(大阪大学大学院生)

研究発表 2 14:15 ~ 14:45

句動詞における動詞と不変化詞の結合特性について 対応分析を用いた考察

杉森 直樹(立命館大学)

研究発表 3 14:50 ~ 15:20

現代英語における there+be の文法化 歴史的発展の視点から 家口 美智子(摂南大学)

< 研究発表第 2 室(研究講義棟 1 階(102 室)) >

司 会 小林 多佳子(昭和女子大学)

研究発表 1 13:40 ~ 14:10

日本人英語学習者の形容詞強意表現 NICE の習熟度別データの分析から

小島 ますみ(名古屋大学大学院生)

研究発表 2 14:15 ~ 14:45

品詞連鎖に着目した日本人英語学習者の中間言語の特徴分析 学習者コーパス NICE を用いて

阪上 辰也(名古屋大学)、古泉 隆(名古屋大学大学院生)

小島 ますみ(名古屋大学大学院生)、杉浦 正利(名古屋大学)

研究発表 3 14:50 ~ 15:20

LDOCE3 における語用論的定義 特に談話標識に注目して 白土 淳子(北海道大学大学院生)

園田 勝英(北海道大学)

< 休 憩 15:20 ~ 15:40 >

シンポジウム 15:40 ~ 17:50 (研究講義棟 1 階マルチメディアホール(101 室))

《 ESP におけるコーパス活用の意義と課題 》 司 会 石川 有香(名古屋工業大学)

第 1 部 ESP におけるコーパスの意義 PERC コーパスを例に

講 師 野口ジュディ津多江(武庫川女子大学)

第 2 部 ESP コーパスを利用した英語教育 様々な試み

論文読解・論文作成のための ESP コーパスの利用 講 師 石川 有香(名古屋工業大学)

コーパスとしての Web resources の利用 講 師 野口ジュディ津多江(武庫川女子大学)

口頭発表のためのバイリンガル・コーパスの利用 講 師 国吉 ニルソン(早稲田大学)

閉会の辞 投野 由紀夫(東京外国語大学)

《懇親会 時間：18:10 ~ 20:00 場所：学生会館 円形食堂 会費：4,000 円》

【ワークショップ】

From Language Analysis to Language Simplification with *AntConc* and *AntWordProfiler*

Laurence Anthony (早稲田大学)

Since the 1960s, corpus linguistics tools have been used to identify the fundamental building blocks of languages through the analysis of ‘authentic’ or ‘natural’ language usage. Indeed, many experts include the term ‘authentic or ‘natural’ language as part of the definition of corpus linguistics itself. However, in recent years, the scope of corpus linguistics has broadened to include studies of ‘inauthentic’ language use that nevertheless offer insights into new language teaching approaches. For example, recent studies on learner and textbook language have revealed aspects of languages that are particularly difficult for learners, and also suggested more effective ways to sequence teaching points in classroom materials.

Following a similar trend, vocabulary studies have also moved beyond more theoretical aspects of vocabulary acquisition and the representation of vocabulary in the mind to now include those that focus on practical approaches to vocabulary teaching and learning in the classroom. Interestingly, many of these new approaches have been informed by corpus-based studies. Also, there is now strong evidence showing that classroom materials with a controlled or simplified vocabulary range can be highly effective. Again, the research on vocabulary has demonstrated that corpus linguistics and ‘inauthentic’ language use are not mutually independent.

In this workshop, I will first demonstrate how traditional corpus techniques can be used to inform teachers and learners about language usage, and how this knowledge can be applied in an ESP classroom setting. I will then show how the results of corpus studies can be used to create new ESP language teaching materials with a carefully controlled vocabulary range that meets the needs of learners. For the first part of the workshop I will use a powerful but user-friendly corpus analysis program developed by the presenter called *AntConc*. For the second part of the workshop, I will introduce a new tool called *AntWordProfiler* that works smoothly with *AntConc* and is also intuitive and easy to use. Both tools have been used extensively in the creation of a very large scale ESP program in the Faculty of Science and Engineering, Waseda University, Japan. They are both freeware, multiplatform programs that can be downloaded from the presenter’s website.

【研究発表第 1 室】

【研究発表 1】

英国高級紙社説における人称代名詞 Involvement と detachment

三木 望(大阪大学大学院生)

本発表は、英国高級紙を代表する 4 紙 *Times*, *Guardian*, *Independent*, *Daily Telegraph* の社説コーパス (各約 30 万語) をもとに、人称代名詞を取り上げて、英国高級紙の新聞社がどのように読者と距離を推し量りながら、マスコミュニケーションを展開しているのかを考察する。

始めに、各紙の英国社説コーパスから 27 の人称代名詞の頻度を取って分割表を作成した。そして、その分割表を統計解析用ソフト R で英国社説コーパスにおける代名詞全体の分布傾向を捉えるために対応分析を、人称代名詞ごとの各社説コーパスの分布傾向を捉えるのにクラスター分析を用いた (Cf. 田畑 2004)。次に、各人称代名詞と左右の共起語 (L1/R1) の頻度から G スコアを Excel で計算した。G スコアの結果に従って、共起語を最も結合度の高い順に並び替えて、各新聞社の人称代名詞の使用傾

向を明らかにすると同時に、これらの共起語をコンコードスラインで質的分析を行った。

分析の結果、英国社説は一人称代名詞複数形について *Times/Guardian* と *Independent/Daily Telegraph* の二つグループに分かれた。前者のグループで一人称複数形の頻度が後者よりも低かった。*Independent* と *Daily Telegraph* では、we の共起語(R1)の中で should/must といった強調を表わす助動詞の高い G スコアが目をつけたが、*Times/Guardian* では must が we の共起語(R1)で考察されなかった。need は we の共起語(R1)として全ての社説コーパスに考察されたが、特に G スコアは *Independent* が高く (*Independent* 158.2768, *Daily Telegraph* 92.7282, *Guardian* 90.4023, *Times* 25.4545)、we と併用させることによって読者を巻き込みながら語調・語感を調整していることを示唆していた。

また、クラスター分析により *Daily Telegraph* は二人称代名詞の頻度が他紙より顕著であった。*Daily Telegraph* の you は if と when との頻度及び G スコアが高く、if/when の条件節の中に you を使用することによって、読者を現実世界から引き離して、自分が主張したい仮想世界に封じ込めて、自己の主張を展開している(Cf. Chafe, 1982)。

人称代名詞の研究は、学習者コーパス(Petch-Tyson, 1998)やアカデミックライティングでよく取り上げられていたが(Hyland, 2005; Kuo, 1998; Tang & John, 1999)、本発表では、議論文を代表する社説に焦点をあてて、議論文における人称代名詞の役割と、英国高級紙の1つの特徴をまとめる。

【研究発表2】

句動詞における動詞と不変化詞の結合特性について 対応分析を用いた考察

杉森 直樹(立命館大学)

句動詞の習得は、英語学習者にとっては容易ではないとされるが(Granger, 1998; Liao and Fukuya, 2004)、その理由の一つとして、句動詞を構成する動詞と不変化詞(particle)の膨大な組み合わせがあることが挙げられる。Moon (1997)によれば、'Phrasal verbs are often presented as arbitrary combinations which cannot be analysed and rationalised.'とされているが、句動詞を構成する動詞と不変化詞の結合については、コーパスを用いた分析を行うことによって、その規則性の有無や特性を分析し、句動詞の学習に利用することが可能であると考えられる。そこで、本研究では、British National Corpus(BNC)から高頻度で使用される句動詞を抽出し、その動詞と不変化詞の結合パターンの分析を試みた。本研究で分析の対象としたのは、不変化詞が副詞であるもので、carry out や pick up など一般に'phrasal verb'とされているものである。そのため、look at などの'prepositional verb'や get away with などの'phrasal-prepositional verb'は分析の対象に含めていない。

頻出句動詞の抽出には、BNC から N-gram データの抽出が可能な Phrases in English を利用し、POS Tag(CLAWS)を指定して、動詞 + (代名詞) + 不変化詞の bigram/trigram を頻度データと共に抽出した。句動詞としての判定には *Longman Dictionary of Phrasal Verbs* 等の句動詞辞典を利用し、最終的に 700 語の高頻度句動詞リストを得た。次に、これら 700 の高頻度句動詞を構成する主要な動詞と不変化詞のリスト化を行い、Biber *et al.* (1999) や投野 (2004) のデータも参考にし、主要な動詞 20 語と不変化詞 15 語を選定した。これらの動詞と不変化詞をもとに、対応する句動詞の頻度データを含む分割表を作成した。この分割表を用いて対応分析を行い、主要句動詞を構成する動詞と不変化詞の結合特性を分析した。その結果、go や get のように、不変化詞との結合に明確な特徴を持たない動詞と、make や work のように特定の不変化詞との結合傾向が強い動詞に分かれることが示された。発表では、この様な動詞と不変化詞との結合特性について分析データをもとに考察を行う。

【研究発表3】

現代英語における there+be の文法化 歴史的発展の視点から

家口 美智子(摂南大学)

存在文(there+be+NP)で there's が NP と数の一致をしない現象はしばしば指摘されている(例:Quirk *et al.* 1985: 1405; Crawford 2005)。Svartvik and Leech (2006: 196)はこれはもはや標準英語の話しことばでは非文法的であるとはみなされないと説明している。Breivik and Martínez-Insua(2008)は存在文が there だけでなく、there + be が文法化をおこし融合し、特に be が単数の場合、とりわけ there's は unanalyzed chunk として機能しているため数の不一致をおこすと説明している。本研究は彼らの主張を検証し、また、現代英語における存在文の様相を明らかにする。

まず、there と be が文法化をした過程を OED を分析して示す。文法化を数の不一致と脱受動化、definite な NP の頻度から検証し、there's は OED に 1584 年(thers の形なら 1562 年)に出現したときにすでに文法化していたことを明らかにする。他の動詞形 there is, there are, there was, there were も there's の後を追って文法化をしつつあることを示す。特に(there is ではなく) there was が there's について文法化をしていることを明らかにする。OED のみならず、現代英語の話し言葉でも同様な傾向が見られる。また語用論的にも there's と there was は似たふるまいを示す。

ディスコースを構成する文法的な要素を因子分析した Biber(1988)によると、ディスコースは、interaction vs. information-focused(寄与率 26.8%)という第一の因子と、narrative/dynamic vs. expository/static(寄与率 8.1%)という第二の因子の二つによりかなりな割合でスタイルが決定される。there's, there was が文法化を早くとげた原因を、スタイル上の必要性の点から議論する。

【研究発表第2室】

【研究発表1】

日本人英語学習者の形容詞強意表現 NICE の習熟度別データの分析から

小島 ますみ(名古屋大学大学院院生)

本研究では学習者の習熟度が明記され、統制されたタスクを用いて構築された NICE(Nagoya Interlanguage Corpus of English)を対象に、初級、中級、上級学習者と母語話者の形容詞強意表現(adjective intensification: *pretty good, hardly surprising*)をコロケーション、語彙、強意語句の種類の観点から比較し、学習者の発達の特徴を明らかにすることを試みた。

本研究では、Quirk, Greenbaum, Leech & Svartvik(1985)の強意語句(Intensifiers)の分類(2つのカテゴリー: Amplifiers, Downtoners; 6つのサブカテゴリー: Maximizers, Boosters, Approximators, Compromisers, Diminishers, Minimizers)に基づいて、以下の研究課題2点を取り扱った。

- 1) 学習者の形容詞強意表現の知識は、コロケーション、語彙の観点から、熟達度の向上に伴い、どのように発達するのか。
- 2) 学習者の強意語句は、熟達度の向上に伴い、どのような種類で用いられるのか。

NICE-NNS の中から、TOEIC スコアを基に、Low(550 以下), Middle(600 ~ 800), High(860 以上)のファイルを 20 ファイルずつ抽出した。それぞれのサブコーパスの総語数は、Low で 5,199 語、Middle で 7,995 語、High では 9,097 語であった。母語話者コーパスは、NICE-NS からランダムに 20 ファイル(総語数 12,179 語)を抽出した。それぞれのグループでの総語数が異なるため、10,000 語あたりの相対頻度に基づき分析した。

本研究の結果より、初級学習者は形容詞強意表現を過剰使用する傾向があり、コロケーションの観

点からみても、語彙の観点からみても、限られた少数の項目を繰り返し使用していた。この傾向は、学習者の習熟度が向上するとともに減少し、上級学習者では、より母語話者の形容詞強意表現と類似した傾向が示された。

また強意語句を種類別にみたところ、初級学習者は強意語句を専ら Boosters として用いていた。中級学習者の強意語句も大部分は Boosters であったが、Minimizers の正しい使用も見られた。初級学習者、中級学習者ともに、Boosters を過剰使用しており、Compromisers と Maximizers は過少使用していた。上級学習者では、このような過剰使用や過少使用は見られず、それぞれの強意語句の種類において、母語話者の使用頻度と類似していた。本研究の結果から、日本人英語学習者の強意表現の発達は、Boosters → Minimizers → Compromisers・Approximators → Maximizers の順に進む可能性が示唆された。

この発達順序と母語話者の使用頻度には中程度の相関があり、このような発達順序を決める要因の一つは、母語話者の使用頻度である可能性が示唆された。

Ellis(2002)は、成人母語話者は語のカテゴリーの頻度に対して、正確な無意識の知識を持っていると述べている。このような無意識の知識が形成されるためには、学習者は自然なインプットを大量に経験する必要があると述べている。Low や Middle の学習者に比べ、High の学習者は、より自然なインプットを大量に経験してきたため、過剰使用や過少使用が少なく、目標語に対する無意識の知識が形成されていると考えられる。

現在中学校や高校で行われている英語教育は、主に文法学習や精読が中心に行われており、インプット量が少ないことが指摘されている(野呂 2008)。教師は簡単なインストラクションはできるだけ英語で行う、精読に加え、多読や多聴を取り入れるなど、学習者のインプット量を増やす必要がある。そのことにより、学習者の明示的な知識のみならず、無意識の知識が増加し、より自然で流暢な言語使用が可能となると考えられる。

【研究発表2】

品詞連鎖に着目した日本人英語学習者の中間言語の特徴分析 学習者コーパス NICE を用いて

阪上 辰也(名古屋大学)

古泉 隆(名古屋大学大学院生)

小島 ますみ(名古屋大学大学院生)

杉浦 正利(名古屋大学)

本研究の目的は、日本人英語学習者の持つ中間言語の特徴を「品詞連鎖」の観点から明らかにすることである。品詞連鎖を元にし、中間言語の特徴を明らかにしようとした研究の先駆けとして、Aarts & Granger(1998)がある。その後、Tono(1999)、Kimura(2004)、田中他(2006)により、日本人英語学習者に特有の品詞連鎖・発達段階の研究が行われてきた。

しかしながら、日本人学習者の中でも、大学生のデータを扱った分析事例は多くない。加えて、学習者の品詞連鎖の分析において、誤用が十分に扱われることがなかった。そこで、本研究では、2008年4月に公開された学習者コーパス「NICE」(207名分の日本人大学(院)生による英作文データ(総語数は約7万語))を利用し、母語話者コーパスとの比較から、日本人大学(院)生の書き言葉での品詞連鎖の傾向を明らかにする。

まず、NICEの3-gramの品詞連鎖を抽出し、投野(2007)で示された中高生の品詞連鎖と比較すると、大学生は「in/of the 名詞」などの前置詞句を最も多用していることが分かった。また、NICEのサブコーパスである母語話者コーパスと比較すると、上位10個の連鎖の内5種類の連鎖が、母語話者の3-gramの品詞連鎖と一致しており、品詞連鎖においては、母語話者に近づいていると言える。

次に、頻度の高い品詞連鎖であった前置詞句に着目し、誤用の状況を分析した。その結果、冠詞が

不要であった事例や、名詞の修飾語句が不自然な形容詞であった事例など、多くの前置詞句が修正されていることが判明した。このことから、品詞連鎖の観点からは一見して母語話者に近づいているように見えるものの、表現には多くの誤用が含まれており、必ずしも学習者が母語話者に近づいているわけではないことが示唆される。

【研究発表3】

LDOCE3における語用論的定義 特に談話標識に注目して

白土 淳子(北海道大学大学院生)
園田 勝英(北海道大学)

LDOCE2(1987: F12-F13)において、G. Leech と J. Thomas が語用論的意味情報を学習者用辞書に体系的に盛り込む必要性を訴えているように、語用論は英語学習辞書編纂にも影響を与えている(Yang, 2007 を参照)。本発表では、まず研究用に限って提供されている LDOCE3 の機械可読版を用いて、当該の辞書において語用論的情報がどのように提示されているかを明らかにする。そのあと、辞書で取り扱われる重要な語用論的表現である談話標識(discourse markers)に焦点を絞り、LDOCE3 が英語の談話標識全体をどのように記述しているのかをまとめる。従来、英語の談話標識研究は、母語話者の言語的直感に基づいて選定された少数の談話標識について、もっぱらコーパスの用例の一つひとつ丹念に観察することによって行われてきた(例えば、Schiffirin, 1987; Stenström, 1994; Aijmer, 2002)。本発表では、それとは異なる視点を LDOCE3 が提供していることを示す。

典型的な談話標識である I mean の一つの意味に、LDOCE3 は次のような定義(1a)と例文(1b)を与えている。

- (1) a. used when explaining or giving an example of something, or when pausing to think about what you are going to say next
- b. He's really very rude – I mean he never even says 'Good Morning'.

談話標識として用いられるとき、I mean は文字通りの「私は言うつもりである」という字義の意味を超えた語用論的意味を持っている。上の例で明らかのように、この語用論的意味に LDOCE3 は「...するときに用いられる」という形式の意味記述を与えている。機械可読版の LDOCE3 を調べると、このように“used...”で始まる定義は約 3,900 あり、これらを詳細に分析すると、組織的に語用論的意味記述に用いられていることが分かる。これをさらに整理分類することによって、研究者ごとに大きく異なる談話標識のリストよりも優れた、より包括的かつ詳細なリストを入手することができる。このリストは、それ自体が英語の談話標識についての記述的研究成果であるのみならず、さらに他のコーパスを用いて談話標識を分析する際の基礎的資料として役立つであろう。

【シンポジウム】

ESP におけるコーパス活用の意義と課題

司会 石川 有香(名古屋工業大学)

English for Specific Purposes(ESP)と言えば、従来は、「ビジネス・レター作成のための英語」や「ホテルでの接客のための英語」など、特定の職業と密接に結びつけて語られてきたために、職業訓練の一環として捉えられることが多かった。しかしながら、近年では、多くの大学がESP教育をカリキュ

ラムに組み込み始めている。また、英語教育学の分野だけでなく、社会言語学や語彙意味論などの研究分野においても、ESPテキスト分析に基づく研究報告が、数多く行われるようになった。研究においても教育においても、ESPは、現在、注目を集めている分野と言える。

本シンポジウムでは、ESPに含まれる様々な分野の中から、理工系ESP分野を中心に、ESP研究・ESP教育におけるコーパス利用の意義を多角的観点から検討する。

シンポジウムは、2部構成となっており、第1部においては、本年6月25日に公開されたPERC(Professional English Research Consortium)コーパスを取り上げ、ESPにおける専門論文コーパスの意義を考えてゆく。第2部では、ESP研究・ESP教育に携わっている3名が、それぞれ、自身の教育・研究の概要をコーパス利用の観点から紹介し、フロアとの討議も交えながら、今後のESPにおけるコーパス利用の展望と課題を検討してゆく。

第1部 ESPにおけるコーパスの意義 PERC コーパスを例に

講師 野口ジュディ津多江(武庫川女子大学)

コーパスと聞くと辞書作成を一番に連想するが、ESPにとっては、単語やブレースレベルを超えて、専門領域で使用する英語のパターンまで教えてくれる、情報の宝庫であると言っても過言ではない。またESPのもう一つのツールである、ジャンル分析と合わせて利用すれば、専門的なテキストを効率よく読み書きする助けとなる。近年、様々なコーパスが作成されているが、これまで、科学技術に特化した、高いレベルのコーパスはなかった。その隙間を埋めるためにPERCコーパスの構築が計画された。

PERCコーパスは、約1700万語を有するタグ付きコーパスである。このコーパスは、科学技術に関する約170領域の領域を網羅しており、これらは、22のサブコーパスに分類されている。また、特定の雑誌からのテキスト収集には語数制限を設けて、雑誌による偏りが生じない工夫もなされている。サブコーパスを選択することによって、当該専門領域に特有の言語パターンを確認できるので、論文読解・作成の際には、情報の正確な伝達に役立つ。

第2部 ESPコーパスを利用した英語教育 様々な試み

論文読解・論文作成のためのESPコーパスの利用

講師 石川 有香(名古屋工業大学)

大学院進学者が大半を占める工学系大学では、上級生・院生を中心とした学生側のニーズ調査でも、研究指導を行っている教員側のニーズ調査でも、英語論文の読解・作成能力の育成があげられている。

研究室配属前の学生には、英語論文読解と作成のための基礎的知識を効率よく習得させるために、コーパスを利用して、ESP教材選定基準を作成することができる。すでに、AWLをはじめ、学術コーパスの分析によって作成された既存の語彙リストも広く利用されているが、科学技術英語論文だけをターゲットとした場合には、さらに効果的な学習語彙リストの作成が可能となる。

研究室に配属されると、情報を正確に読み取り、また、伝達するために、それぞれの専門領域で確立している表現パターンを習得する必要が生じる。その際にも、分野を限定したESPコーパスが役立つ。しかし、コーパスの有用性はそれだけではない。工学分野では、技術革新のスピードが速く、新しい用語や新しい表現パターンが次々と生み出されているため、ESPコーパスを論文読解・作成の補助ツールとして用いる技術の習得そのものが、研究室を離れた後でも、工学技術者を支える重要な技

能の一つとなるのである。

コーパスとしての Web resources の利用

講師 野口ジュディ津多江(武庫川女子大学)

World Wide Web を一つの大きなコーパスとして、専門英語教育に利用することができる。本発表では、教材作成から、聞き取りの練習、学生のレポート作成まで、Web sources の利用を提案する。

教材作成時には、テキストの選択、単語の難度のチェックや、コロケーションの特定などに、コーパス分析の概念を利用する。

聞き取り練習では、Podcast などのサイエンス系ウェブサイトをリスニング教材として利用するだけでなく、ESP のムーブ分析の手法を応用すると、例えば、研究発表時の質疑応答の練習までできる。

また、学生のレポート作成時の「コピペ」を防ぐためにも、同じくムーブ分析を利用すると文書の全体の構造が見えて、読み手をガイドする multiword bundles の発見やキーワード特定ができる。

これらの実践例として、高校生から大学、大学院生のものを紹介する。

口頭発表のためのバイリンガル・コーパスの利用

講師 国吉 ニルソン(早稲田大学)

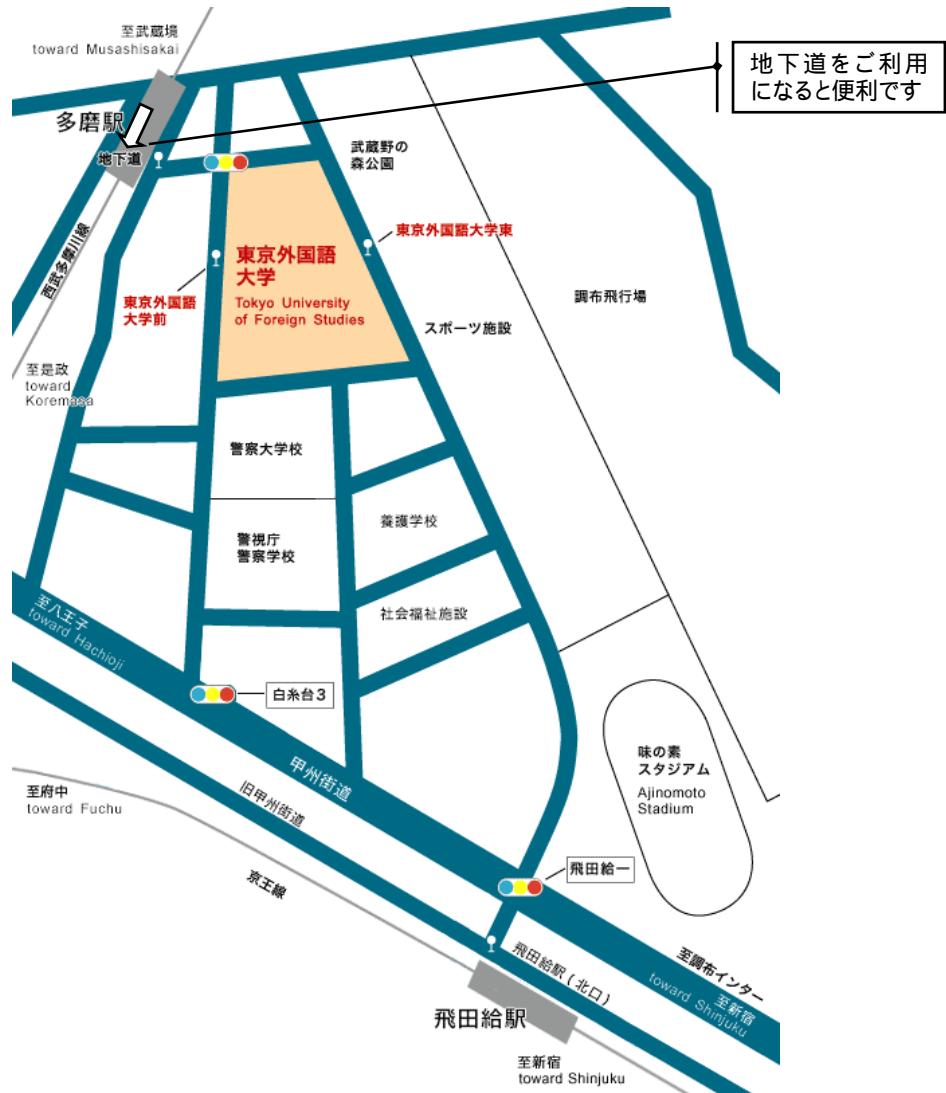
理工系学生には、早い段階から専門分野における主な genre とそれぞれの言語的特徴を把握させる必要がある。理工系では論文および口頭発表が主な genre であるので、それらの言語的特徴を理解できるように、学生を導かなければならない。spoken, written, informal, technical などの表面的な違いから、degrees of technicality を経て、各 genre の構造、moves の概念に至るまで学部学生に伝えるべきであろう。

コーパスを用いることによって、教員が non-native speaker であっても、学生の専門分野に対する知識が少なくても、質の良い sample texts を収集し、それらを Observe, Classify, Hypothesize, Apply(OCHA) することによって、まず、reading や writing に関する skills を向上させる方法を学生に教えることができる。また、理工系分野における口頭発表日英バイリンガル・コーパス(The Japanese-English Corpus of Presentations in Science and Engineering, JECPRESE)の構築作業が進められており、近いうちに口頭発表に対する教育においてもコーパスを活用し、口頭発表でよく使われる表現等をオンラインで検索できるようになる。

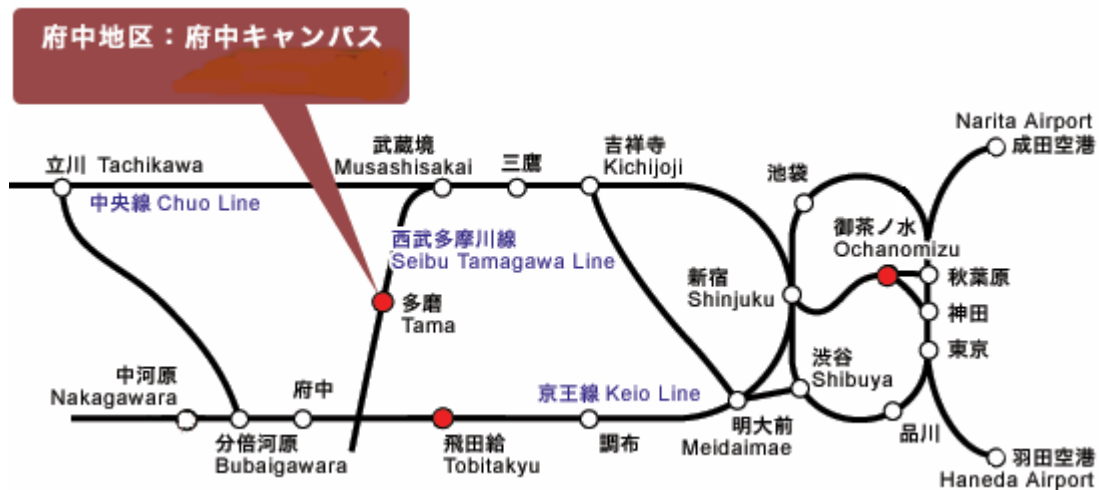
《大会参加者へのご案内》

- 自家用車でのご来場はできません。
- ワークショップの受付は「研究講義棟 2 階マルチメディア室(216 室)」の前で午前 9 時 30 分から行います。
- 大会の受付は「研究講義棟 1 階マルチメディアホール(101 室)」の前で正午から行います。
- 昼食については、大学食堂、多磨駅近辺の一般食堂などが利用できます。
- 校内は分煙措置がとられています。指定場所での喫煙にご協力ください。
- 会員でない方も、「当日会員」として参加していただけます(会費 1,000 円)。

最寄り駅からのアクセス



アクセスマップ



- JR 新宿駅より中央線武蔵境駅で西武多摩川線に乗り換え、多磨駅下車(約 35 分)。徒歩 5 分。
- 京王線飛田給駅から京王バスで東京外国語大学前停留所下車、徒歩 0 分(バス所要時間 約 10 分)

2008 年 9 月 1 日 発行
編集・発行 英語コーパス学会
会長 赤野 一郎
事務局 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1
大東文化大学 山崎俊次研究室内
TEL: 03-5399-7372 FAX: 03-5399-7373
E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp
URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html>
